

—特集 [With Corona, Post Corona における医学教育の展望 (1)]—

巻頭言

藤倉 輝道

日本医科大学医学教育センター

この原稿を書いている今日も、全く COVID-19 の勢いは収まらず、医療現場はもとより医学教育の現場もまた疲弊しつつある。「教育を止めてはならない」を本学でもスローガンとして掲げてきたが、これは全国の教育者（医学部に限らず）の変わらぬ思いであろう。世間では「ニューノーマル」という言葉をしばしば耳にする。医療の現場では若干馴染まない感もある。多少遠隔診療は余儀なくされたが、これが常態化するには至っていない。ニューノーマルの導入において、コミュニケーションスキル、モチベーション管理、セキュリティ管理の重要性が指摘されるが、これは教育の現場でも通ずる部分も多い。

これからの医学教育はどうなっていくのか。少なくとも COVID-19 以前に戻るということは無さそうである。この時点で将来展望を考察することは医療現場で教育に携わる方々にはもちろんのこと、将来的に With Corona, Post Corona で教育を受けた医師を迎えることになる医療現場の方々にとっても有益であろうと考え、この企画を用意させていただいた。

文字通り教育に待ったなしで、この最中、令和 5 年 4 月からの医師法 17 条の改正が決まった。医学生が医業を行うことが、法律で認められることになる。これに伴い、現在、臨床実習前と後に行われている医療系共用試験が公的化されることが決まった。共用試験の重要性が注目されている現状を踏まえ、これを統括する医療系大学間共用試験実施評価機構副理事長の齋藤宣彦先生に『共用試験の公的化に向けての課題』をご解説頂いた。

時に患者の選別が余儀なくされ、それでも多くの医療者が疲労困憊している。欧米では医学生の卒業の前倒し、あるいはリタイアされたベテラン医師への現場復帰の呼びかけなど医師不足への対応が論じられた。このような状況下でのわれわれのある意味行動規範で

あるプロフェッショナリズムについて、日本医科大学客員教授の大生定義先生にプロフェッショナリズム教育の再考というテーマでご執筆をお願いした。

教育を止めないための実践例は、全国の医療系学部で多くの報告があるが、本学ではコロナ以前から未来型医学教育の実践を目指してきた。本誌では、日本医科大学大学院教授救急医学の横堀将司先生に『VR を活用したコロナ禍時代のシミュレーション教育』という先進的取り組みをご紹介頂く。また同時期に横堀先生と取り組んできた未来型医学教育とも関連して、藤倉が DX（デジタルトランスフォーメーション）について少しだけ論説させて頂く。

ニューノーマルと言えば ICT 活用と切り離して考えることは不可能である。そこでこの分野を以前よりけん引されて来られた、自治医科大学准教授の浅田義和先生に『医学教育の現状と ICT 活用のノウハウ』というテーマでご解説をお願いした。

COVID-19 で最も教育上支障を来したのは臨床実習を中心とした教育要素である。先の厚生労働省の門田研究班の一員として医学生の医行為について検証をされて来られた東京大学教授の江頭正人先生に『臨床教育の現状と展望』というテーマでご執筆をお願いした。

そして最後に、我が国の医学教育全体を俯瞰していただくために、日本医学教育学会理事長の小西靖彦先生に『日本における医学教育の将来』を論じて頂いた。

もともと日常の業務に忙殺され、それにコロナ禍も加わり大変な中、快く本誌へのご寄稿をお引き受けいただいた諸先生方に心より御礼を申し上げる次第である。

いずれコロナ禍が終息し、この数年が良い意味での医学教育の転機となったと振り返る際の一助となることを願い、我が国の医療現場、教育現場でご尽力されている諸氏に本誌をお届けする。